

香かおる子こ

(一)

紫式部物語

目次

第一章 香子 かおる 4

第二章 蔵人 くらうど 18

第三章 北山詣で きたやまもう 28

第四章 今上帝出家 きんじょうていしゆつけ 60

第五章 新帝即位 74

第六章 出仕 しゆつ 87

第七章 新手枕 にいしたまくら 132

第八章 宇治行 うじここう 149

第九章

越前下向えらぜんげこう

160

第十章

越前国府えらぜんこくふ

189

第十一章

起筆

211

第十二章

雨夜の品定めあまよしなさだめ

245

第十三章

越前の春えらぜん

296

第十四章

京上のぼり

359

第十五章

懸想文けそうぶみ

401

第一章 香子かおるこ

あれは八歳の春まだきの頃だったか、父君に呼ばれて、庭に面した部屋にはいった。

「香子きょうこ、今日からそなたのことを、かおるあつだたみこと呼ぶことに決めた」
厚畳あつだたみの上に坐すわるなり、父君が言った。

「かおるこ、でございますか」

「そうだ。もともと、そなたの名を香子きょうし、あるいは香子きょうことしたのは、そなたの亡き母だった。しかし、そなたの弟のぶのり惟規を産んだあとの肥立ひだちが悪く、旬日じゆんじつののちに身みまかった。そなたはまだ二歳だったから覚えてはおるまい」

何度も聞かされた話を父君は繰り返す。そのとき、決まって父君の目は赤く潤うるむ。

「今日のそなたを見れば、どんなにか喜んだらう。そなたの母は、自ら命名したにもかかわらず、そなたの名を呼んだのは、ほんの二年足らずだった。誠に不憫ふびんな女であった」

父君は涙をこらえるようにして、庭先を見やった。その母と、今度の「かおるこ」とはどんな繫つなが

りがあるのか、首をかしげた。

「以来、私も、そなたの乳母めのともみんな、改まった席ではきょうし、身内ではきょうこと呼び習わしてきた。私は今日以降、そなたをかおること呼ぶ。みんなに、そう呼べと強しいるつもりはない。しかし、いずれ広まっていくな」

「どうして、かおることでしようか」

幼い頭で考えてもわからず、訊きくしかなかった。

「そなたの資質は、誰が見ても、他より抜きん出ている。実に、女子おなごにしておくには惜おしい。男子だんしであつたならば、この堤第つみだいの邸やしきを再興するにふさわしからう。そして誰もが認める、ひとかどの人物になる。その資質が薰かおるからだ。ちやうど、今匂におってくる紅梅こうばいのようにな」

父君の見やった先に、しだれ紅梅が数輪、花をつけていた。梅には紅梅も白梅はくばいもある。人にも女子と男子がある。梅に優劣ゆうれつなどないのに、人には男女の優劣があるのが、幼な心にも不思議だった。しかし、それを父君に訊いてはいけないような気がした。

「そなたの弟の惟規は長男だから、幼きときから漢籍に触れさせた。そなたはいつも傍そばにいて、耳を傾けていた。ところが、たった二歳しか違わないのに、そなたはどんな書物でも、すんなり頭に入ることが出来る。ちやうど乾いた砂が水を吸うようにな」

父君は笑顔で言い足す。

「さ、香子、行ってよい。また惟規に教える時刻になれば、そなたを呼ぶ。庭には、一足先に春が巡めぐつて来ておる。春を探すのもよからう」

春を探せ、とは漢詩人の父君らしい言い方だと思った。東宮とうきゆう様の読書よみ始めの儀ぎで、副侍ふくじやく読を務めた

のが自慢の父君は、いつもこんな風に耳に残る言い方をした。

庭に下りると、確かに春が来ていた。白梅も蕾を無数につけている。あと十日もすればほころびはじめるところが、池の脇の桃は、まだまだ蕾が固い。地面に枝を垂らしている柳は、その若葉の緑が目によい。同じように池向こうの遣水近くの五葉松も、黄色い芽を枝先につけている。そこにも驚でも来て、初音を聞かせてくれると、もう確かに春だった。

先祖代々藤原家が受け継いできたこの邸は、古色蒼然としてはいるものの、内も外もよく手入れされていた。内裏の東にあり、邸の西側には中川、東側には鴨川が流れている。夏になれば、川の水もぬるむので、乳母たちに連れられて、水に足を浸した。人の姿に驚いて、水鳥が一斉に飛び立つ音が耳に届く。鳥たちが空に舞い上がった先に、ひっそりと片足で立っているのは白鷺だった。悠然として、頭さえ動かさない。その高貴な姿が幼い目にも鮮やかだった。

邸の方向に目を転じると、竹垣や土塀の向こうに桜や桂、桐や柏、赤松、真竹などが見える。その間に瓦葺きや檜皮葺きの屋根が覗く。それらの樹木の高さが、そのまま堤第の古さを表していた。

この堤第が父方の曾祖父伝来の邸であることは、何度父君から聞かされたらう。邸の広大さは、曾祖父がいかにか偉かったかの印だと父君が言うたび、この家が代を経る毎に、先細りしていることを、幼な心にも感じた。

曾祖父は藤原兼輔といい、中納言の位まで昇りつめたという。娘の桑子という人を醍醐天皇の後宮に入内させ、更衣の身分で章明親王をもうけた。その折の歌が『後撰和歌集』にあり、暗唱させられた。

人の親の心は闇にあらねども

子を思う道に惑いぬるかな

このときの入内にまつわる話は、『大和物語』に書かれ、その四十五段を何度読まされたことか。他に『兼輔集』まであつて、これも父君が手本とする歌集だった。

祖父の雅正殿もやはり歌人であり、周防守や豊前守に任じられたという。そして父君の自慢は何といつても、その雅正殿が右大臣藤原定方殿の娘を貰い、自分はその息子であるということだった。つまり自分の母方の祖父が右大臣だったのが、父君の誇りなのだ。

幼い頭には、それが何程の意味を持つのかは解せなかった。とはいえ、今から思えば、この分不相応に広大な邸に様々な人が訪れ、父君にいろいろな邸や社寺に連れて行かれたのも、先祖の威光のお蔭だった。

返す返す心残りなのは、母がどんな顔であり、どんな人であったか、微塵も覚えがないことだった。そのため、母方の祖父である藤原為信殿と会ったときなど、その老いた顔をまじまじと見入った。しかしいくら見つめたところで、母の面影を窺うのは無理だった。唯一、その祖父の兄である為雅殿から、「お前の母は賢い女子だった」と言われたときは、心底嬉しかった。

あるとき、父君に向かって、「亡き母君は賢い人だったのでしようか」と訊いたことがある。父君の返事は「それはもう、言わずと知れたこと」だった。

父君としては後添えの母君への遠慮もあったのだろう。あからさまには「賢い」とは言えなかったのだ。この後添えの母君は、情のある人だった。病弱な姉の朝子、弟の惟規を含めて、三人をよく

慈しんでくれた。

この母君の嘆きは、何と言っても邸の古さだった。特に気持ち悪がったのが、曾祖父から三代にわたって所蔵されている和漢の書だった。

広い邸の西側には伯父の為頼殿の一家も住んでいる。優れた歌人である伯父君は、多くの和書を集めていた。一方の父君は漢詩が得意なだけに、架蔵されていない漢籍を買い求めるのに熱心だった。それら和漢の典籍が収納されている部屋は暗く、天井に蜘蛛の巣が張り、どことなく煤けている。母君はその部屋の前を通るのを忌み嫌い、やむを得ず通らなければならぬときなど、小走りになる。それが幼な心にもおかしかった。

「あそこには、何代にもわたる靈魂が詰まっています」が、母君の口癖だった。

その母君とて、子供たちを連れてよく寺詣りをし、墓所を訪れるのは好んでいた。墓は好み、古い典籍を嫌う、その矛盾に首をかしげた。墓は墓で、大したことは学べない。ところが死んだように動かない古本は、開くとこちらが知りたいことを語りかけてくれるのに。

典籍が積まれているその部屋に、幼い頃から父君に手を引かれて何百、何千回足を踏み入れたらう。曾祖父君が既に所蔵していたと思われる『論語』や『千字文』は言うに及ばず、『古事記』や『日本書紀』『白氏文集』『史記』『文選』、さらには『法華経』から、伯父君が集めた『古今和歌集』以下の勅撰集や私家集も、夥しく積み上げてあった。

そこに父君が購入揃えた諸々の詩文集、例えば『懐風藻』や『凌雲集』『文華秀麗集』に加え、嵯峨天皇や空海の漢詩文、菅原道真公の『菅家文章』や『菅家後集』の他、『経国集』、円仁の『入唐求法巡礼行記』、そして『和漢朗詠集』に『土佐日記』もあった。

とはいえ、病気がちだった姉君の言いつけで、よく取りに行ったのは、書架しよかの隅の方に積まれていた日記や物語集だった。埃ほこりっぽい書庫を好まない姉君は、右隅の上から何番目の棚にある、誰それの本を持って来て欲しいと指図した。『蜻蛉日記』『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』、それに様々な歌詞集も、姉君は好んだ。

かび臭い書庫を毛嫌いする母君も、日当たりのよい縁側で、姉君の読む物語や日記類にはよく耳を傾けた。

「わたしは目が悪いので、こうやって聞くほうが何倍も楽しい」

母君はよくそう言うものの、目が悪いはずはない。細かい手仕事は乳母たちよりも上手じょうずだったし、遠い梅の枝にとまる目白めじろの姿にもいち早く気がついたからだ。文字そのものに、さして興味を持っていないせいなのかもしれない。それだけに姉妹二人が仲よく本を開いている姿は、尊いものに見えるのだろう。そこに自分も加わるのが喜びだったのだ。

弟の惟規はそんな光景を見て羨うらやましがり、父から呼ばれて漢籍の講読をするときになっても、もじもじするばかりだった。姉君も一緒ならとぐずるので、仕方なく一緒に父君の前に坐ってやらねばならない。

後添えの母君には、父君との間にもうけた年子の二人、惟通これみちと雅子まさこがいて、姉君の読み聞かせに耳を傾けた。

惟通は兄の惟規とは二つ違いだったから、後には兄弟が並んで、父君の教授を受けるようになって。二人が逃げ出さないように、後ろに坐って見張る役をさせられる。ときにはこれこれの書物を持って来てくれと言われて、書庫にはいる。その途中で、姉君からも、「ついでにあの本も頼みます」

と言われる。両腕一杯に書物を抱えて戻ってくるのが日課になった。

幸い書庫には、上の棚の書物を取るために踏み台が置かれていた。しかしこれに乗っても最上段の棚に手が届かないので、父君は梯子はしこも作らせて置いてくれた。これは便利だった。慎重によじ登ると天井に手が届く。こうして月明かりさえあれば、灯明みあかしなしで、言いつけられた通りの典籍に手を伸ばすことができた。その際、注意しないと蜘蛛の巣がべつとりと顔に張りつく。

この時期、不思議でならなかったのは、父君がいつも邸にいたことだった。家を出るのは十日に一度くらいで、母君の話では、どこぞに招かれて、漢詩文の手ほどきをするためだという。そんな無聊りようをわずかでも紛まぎらすために、子弟の訓育に力を入れているのに違いなかった。弟二人にとつては、それがはた迷惑だった。

この頃の楽しみのひとつは、伯父君や父君に連れられての外歩きだった。中でもひと月に一度は訪れたのが、邸からすぐ近く、南西の方角にある大邸宅だった。そこが具平親王の本邸で、舟が浮かべられるくらい大きな池を擁ようしていた。具平親王にはその他にも邸があり、ひとつが少し南の方にある桃花閣で、これは近衛大路このえおほみちに面していた。もうひとつは遠く六条坊門むくじょうほうもんにある千種殿ちづねだった。

具平親王がどういってお方なのかは、祖母君から聞かされた。祖母君は右大臣だった藤原定方殿の娘であり、その妹君が、醍醐天皇の子である代明親王よしあきみに嫁いでいた。その娘が莊子女王そうしじよおうちうであり、村上天皇むらかみの妃きさきだった。二人の間にお生まれになったのが、具平親王なのだ。まだ二十歳はたちそこそこなのに、大人の風格が備わっていた。

初めてお目通りが叶かなった日のことは、よく覚えている。別邸である桃花閣の中の一室は、部屋自体が池の上に張り出していた。そのとき集まっていた殿方とのがたは五、六人はいただろうか。

「ほう、そなたが為時自慢の娘子か」

はい、香子ですと答えたとき、親王は満面の笑みを浮かべられた。かねてから父君が我が娘を自慢していたことが恥ずかしく、顔が火照つて、その先、何を申しあげていいのかわからない。

「よかった。今日は丁度歌合せでもある。為時殿と為頼殿の間に坐つて、誰が一番良い歌をものするか見物するといい。こちらが我らの師、慶滋保胤様だ」

名前を聞いたとき、一体どんな字を書くのだろうか、一瞬首をかしげた。その人は上座に坐り、父君よりはだいぶ年長で五十歳くらいだろうか。顎鬚を長く伸ばした、唇の赤い方だった。

慶滋様が歌の題を出し、居並ぶ人たちが紙にさらさらと歌を書きつける。その日のお題は「桐」だった。ちょうど池の端で桃の花が少し盛りを過ぎかけ、池向こうの大桐が、紫がかつた花房をいくつも垂らしていた。

殿方たちは、それぞれ書きつけた歌を慶滋様の前に置いて、元の座に控える。それが終わったとき、不意に慶滋様から声をかけられた。

「為時殿の娘子で香子とやら、そなたはいくつになる」

「はい、十一になります」

簡単な質問なのではつきり答える。

「何か桐にまつわる逸話なり、言い伝えを知っているか」

「はい、瑞兆第一とされている鳳凰がとまるのは、唯一、桐の木でございます」

答えたとたん、嘆声が上がリ、具平親王に至つては手を叩いて喜んだ。

「なるほど、なるほど、為時殿。こう言つてはなんだが、とんびが鷹を生んだのう」

慶滋様に言われた父君は気を悪くするどころか、嬉しそうだつた。

「いやいや、為時あつてこそその娘子だろう」

そう取りなしたのは具平親王だつた。

それぞれの歌を慶滋様が批評され、こうしたらどうか、こうすべきだと直されるのは、子供心にも面白かつた。

歌が終わると、漢詩文の詩合せしあひに移つた。すると慶滋様から、ここに坐りなさいと手招きされた。父君から背中を押されて、慶滋様の横に坐る。何とも恥ずかしい限りで、肩を縮めていた。

「さて、詩合せの題は、先刻、為時殿の娘子、香子殿が口にされた瑞兆です。優劣の判定には、この香子殿も加わつてもらいます」

居並ぶ殿方たちは三人ずつに分かれ、それぞれが首を捻ひねりながら、詠詩えいしを書きつける。父君と相對するのは伯父の為頼殿だつた。為頼殿は早くもすらすらと料紙りょうし二枚に書きつける。父君のほうは、詩想がまとまらないのか、窓の外や天井に目をやつていた。

天井は、中央が上に凹くぼんだ網代あじろの笠作りかさをづになつていた。こういう部屋で、書物を日がな一日ゆつくり読めたら、どんなに心地よからうと思ひながら眺ながめた。

出来上がった詩文は、一方を慶滋様に渡し、一方は手元に残す。それを二度朗詠ろうえいして、優劣の判定をするのだ。具平親王とその相方の詠詩では、慶滋様は具平親王の方に優をつけられた。

「香子殿、そなたはどう思うか」

慶滋様が訊く。

「はい。その通りだと思ひます」

「その理由は」

「聞いていて、どこか心地よいものがありました。自分が鳳凰になって大空に舞い上がるような気になりました」

正直に答えると、具平親王が笑いながら手を叩いた。

次の二人の詠詩は、互角だと慶滋様が判じ、それでよいかと、また訊かれる。

「右の殿方の漢詩が優れているような気がします」

小さな声で目を伏せながら答えたとき、また顔が赤くなる。

「ほう、それはまたどうして」

「詠じられている瑞鳥ずいちょうの二つ、鳳凰と鶴を見事に対比させているように思えました」

答えると、優の殿方が頷きうなず、劣の殿方が参ったというように頭に手をやった。

「ということで、優劣は香子殿の判じの通りです」

慶滋様が言い、益々ますます恥ずかしくなって身を縮めた。

父君と伯父君の詠詩では、慶滋様は伯父君の勝ちとした。

「香子殿、これでよいかな」

またしても尋ねられる。

「はい、伯父君の漢詩のほうが、柄がらが大きいように思えました」

「柄がらが大きいとな」

「はい。残念ながら父君の作は、小さくまとまり過ぎています。瑞兆の大らかさに欠けます。それに対し、伯父君の漢詩は宇宙の大きさを感じさせます」

「なるほど、なるほど」

慶滋様が領かれる。「為頼殿と為時殿、そういうことじや」

これが判定だった。

帰りがけ、居並んだ殿方たちから過分な褒め言葉を貰った。子供の、しかも女の分際ぶんざいでさし出がましいことを言った事を後悔して、気が沈んだ。とはいえ、伯父君から「香子、でかした」と言われ、父君も口には出さないものの満悦まんえつ顔がおなので、牛車ぎつしゃが堤第ついでいに着く頃には、心も晴れた。

その後も父君に同行して、毎月のように具平親王の邸に参上した。具平親王が、是非ぜひともあの娘子を連れて来いと父君に命じられたらしかつた。それは、すぐ南の桃花閣とうかかくだったり、ずっと南の千種殿せんしゆてんだったりした。

会合は必ずしも歌合せや詩合せばかりでなく、政まつりごとについての談義もしばしばで、父君の後ろに坐つてじつと聞き入る他なかつた。どうやら、具平親王やその師の慶滋保胤けいしほいん様以下、伯父君や父君を含めて七、八人の殿方は、政まつりごとに関して、志をいっにしておられるようだ。

具平親王の邸を訪れるのが楽しみだったのは、歌合せや政事談義を聞く以外にも、邸のたたずみや、調度品ちやうどひんの美しさを目のあたりまにできたからだ。古色蒼然こしきそうぜんとした堤第ついでいとは異なる、新鮮な風情ふうせいに満ちていた。しかも本邸と二つの別邸には、それぞれ別の趣向しゆこうを凝こらしてあつた。

本邸は池に舟が浮かび、遣水の先には滝まである。部屋に通されるまでに、置かれている衝立ついたての襖障子ふすましょうじ、屏風びやうぶ、掛軸かぎやくに目を奪われる。薰たき染しめられた香かうを、何種類かかぎ分けることができた。

それに対して桃花閣の良さは、何といつても池の上に張り出した網代天井の部屋だった。四季折々の景色ばかりか、夏には開け放たれた三方からはいつてくる風が快い。

もうひとつの別邸で六条院とも呼ばれる千種殿は、瀟洒しょうやな造りで、都の中にありながらも、どこか静謐せいひつさが漂っている。そこでの父君たちの会合はしばしば、声を潜ひそめて政の談議になりがちだった。

あるとき、祖母君に頼まれて書庫にはいり、三つ四つの私家集を持って行った際、「香子は、具平親王にとっても気に入られているよ」と言われた。嬉しそうな顔だった。

「為時殿は、かつて具平親王の家司けいしを務めていたことがある。だからこそ、香子の才覚を認めて喜んでおられる」

「具平親王はとてもお優しい方です」

かしこまって、そう答えると、

「もうひとつ、具平親王は伯父の為頼殿には、頭が上がらない面もあります」

「えっ」

驚くと、祖母君が声を低めた。

「以前、具平親王は、屋敷に仕つかえていた雑仕女ざうしめとの間に子ができた。赤子あかごの処置に困られて、まず家司であるお前の父に相談し、為頼殿の息子伊祐殿これすけの養子にすることになった。それがあの幼い頼成よりなりだ」

「そうですか」

初めて真相を聞かされて納得する。あの幼い子がことさら大事に扱われているのは、具平親王の実子だったからだ。

「その雑仕女はどうになりましたか」

気になつて訊く。

「名は大顔おおがほと言う。美しい顔だつたから、そう呼ばれたのだろう。この女を具平親王は大変愛めでられた。牛車に乗せてあちこちに連れて行かれた。あるとき、広沢池ひろさわのいけのほとりにある遍照寺へんじょうじに行かれた。あの辺りは観月かんげつの名所だ。香子も行ったことがあるはず。親王はその女子と、満月を觀賞なさりたかつたのだらう。ところが大顔は牛車の中で、物の怪けに襲われて忽然こつぜんと息を引き取つた。具平親王は驚かれ、すぐさま付人つきびとをこの堤第まで走らせ、為頼殿と為時殿に事の次第を知らせた。すわ、お家の大事と心得た二人は、牛車で遍照寺に駆けつけた。大顔の亡骸なきがらを自分たちの牛車に乗せ、化野あだしのまで運び茶毘ぢびに付した。これで事なきを得たけれども、悲嘆にくれたのは具平親王だよ。大顔と共に乗つていた檳榔毛車びんろうけくるまを、おおがおと名付けられた」

可哀想かわいそうと思ひながら、親王の脇で怪死する女の姿が目まに浮かぶ。

「香子は知らないと思ふが、親王は色好みで、正室のみならず側室を三人も持たれている。雑仕女に取り憑ついたのは、おそらく正室か、側室のうちの誰かの生霊いきりようだらうね。ひとりの生霊ではなく、二人か三人の生霊がこぞつて取り憑いたのかもしれない」

「そんな不幸な生母のことを、あの頼成はいつ知るのでるか」

つい訊いてしまふ。

「いづれ頼成は、自分が親王の落胤らくいんだと知らされる。しかし実母が雑仕女とは、ついぞ知らされない。人づてに知るようになれば、薄幸はぶさうな生母について、為頼殿か伊祐が話さだらう」

胸むねが塞ふさがるのを覚えつつ、祖母君の部屋を退くと、庭に雪が降りはじめていた。部屋に戻つても書を開く気にもならず、音もなく降る雪を眺めた。

雑仕女はおそらく、親王の寵愛を身に余る光榮だとは思いつつも、自分が仕えていた正室あるいは側室の奥方に、心の内では懺悔していたのだろう。自分の定めを呪っていたのかもしれない。

あの遍照寺の大池は桜の名所でもあり、二年前に母君と姉君と三人、牛車に揺られて見に行ったことがある。

大池の水面に降り散る花びらの

この世の名残りしばしとどめん

散り急ぐ花びらが、この世からすぐには去り難く、池面に浮かんで、少しでも長らえようとするのを詠んだつもりだった。母君がこの歌を褒めてくれたのを思い出す。

祖母君から大顔の話を聞かされたあと、具平親王の許を訪れるたび、親王のお顔や立振舞いに、ことさら目がいくようになった。整った鼻筋と穏やかな目、よく通る声に乗せられる言葉の優しさ、優雅な手つきなど、どこを取っても貴公子だった。親王の衣に薫き染められた香は、いつも変わらぬ匂いを漂わせていた。父君によると、おそらく貝香と麝香を軸にした香だろうということだ。

そんな具平親王の正室と三人の側室は、それぞれ、本邸や桃花閣、千種殿に住んでいるはずだった。しかし、一度たりとも、その姿を見ることはなかった。